

■ 人生百事不如意 成業偏忍兼勉因  
吾子須磨魂一片 義光未遍照皇洲

(意訳：人生は万事思うようには運ばない)

事業は忍耐と努力をしてみても初めて成就する  
まずなすべきは精神を磨くこと

神の義はいまだ日本をあまねく照らしてはいない)

布施 智子 (同志社社史資料センター社史資料調査員)

留学を志して渡米した教え子の蔵原惟郭への手紙(1885年5月30日付)の文末に認められた七言絶句である。新島は、休養と大学設立募金運動とを兼ねた2回目の欧米歴訪の最中で、在ボストンであった。蔵原は同志社を中退して1884年に渡米したが、なかなか進学先が見つからず、当時はミネソタのノースフィールドで働いていた。

長い目で見れば、一時の艱苦に過ぎないのかもしれないが、その渦中にある当事者にとつては、先の見通しもない不安と焦りを抱え、長く暗い時代にいるように感じられるというのによくあつた。異国の地で、学問を志しながら労働して時を待つ教え子の姿に、新島は自身の若い頃の姿を重ねていたのだろう。蔵原の進学先を世話したり、自分が愛用した衣服を与えるなど、物心両面で彼を支えた。

いわゆる新島襄の名言は数あれど、特に生徒や教え子宛の手紙にこそ多く表れていると考える。教え子の人生に対する厳しくも温かい眼差しが、言葉となつて表現されているからであろう。この蔵原宛の書簡も然りで、今回紹介した漢詩のみならず「労働は人生の良薬なり」「人労して初めて黄金の貴きを知る」「勉めよや、忍べよや」等、学問以上に労働の大切さを説き、激励する文言が散りばめられている。是非、若い人達に全文を一読いただきたい手紙である。

## ■ Doshisha college song Words by W. M. Vories Music by Carl Wilhelm

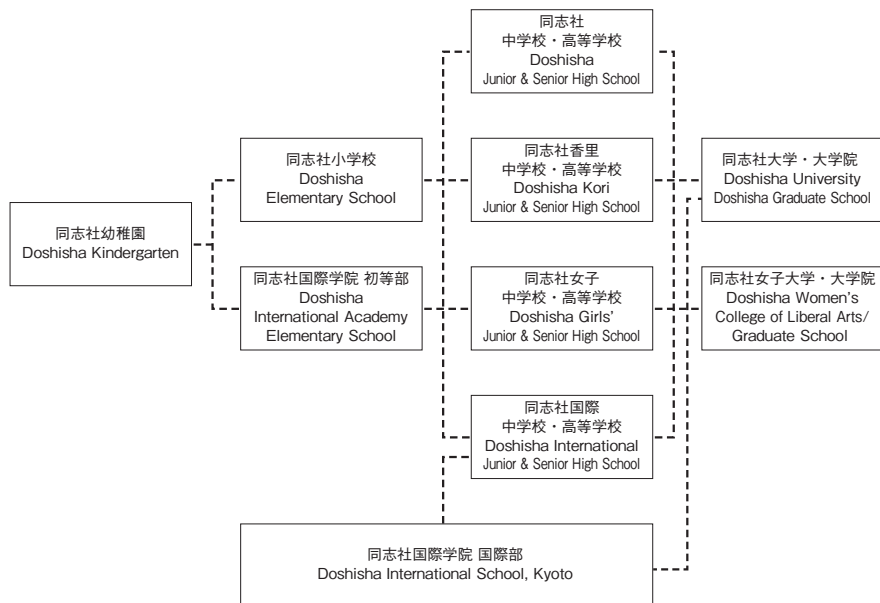
One purpose, Doshisha, thy name  
 Doth signify; one lofty aim:  
 To train thy sons in heart and hand  
 To live for God and Native Land.  
 Dear Alma Mater, sons of thine  
 Shall be as branches to the vine;  
 Tho' through the world  
 we wander far and wide,  
 Still in our hearts thy precepts shall abide!

同志社よ、その名は一つの目的を意味する。  
 その学徒の精神的、肉体的、  
 神のため、祖国のため、生きんという  
 一つの崇高な目的を。  
 親愛なる母校よ、同志社の学徒は、  
 ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであろう。  
 たとえ、世界くまなく、広くはるかに、  
 われらさまようと、汝の教訓は、  
 われわれの心に永遠に生き続けるであろう。

(訳：児玉 実英)

## ■ 同志社の一貫教育体制

### The Integrated Educational System of the Doshisha



\*一定の条件があります (帰国生の要件)